J-307（15:45-16:15） 2026/10/11
於　大阪電気通信大学　　研究発表（30 分）

トランプ劇場は西部劇か？[1]

石上文正（人間環境大学）

1. はじめに

アメリカのトランプ大統領の様々なメディアを通じた行為や発言が、“トランプ劇場”の様相を呈している。本発表の目的は、このトランプ劇場が、アメリカ映画の一つのジャンルである西部劇に、その物語構造の基礎が似ていることを示すことにある。なお、文中のボールド体は、すべて強調のために、発表者がおこなったものである。

「西部劇」の定義には様々あるが、次の American Film Institute の定義は、簡にして要を得たものである：“AFI defines ‘western’ as a genre of films set in the American West that embodies the spirit, the struggle and the demise of the new frontier.” この定義では、西部劇は「アメリカ西部」が舞台として設定され、時間的設定は“the new frontier”が存在した時代ということになる。

2. 西部劇における三つの要素―“the struggle,“ “the spirit” and “the demise”―

上記定義のなかで言及された 3 要素を分かりやすく説明するために、西部劇の代表作品として映画 *Shane*（監督：Stevens, G. C., 1953）を例に挙げる。同映画には、後述する重要テーマである**〈秩序 vs. 無秩序・カオス〉**に関する発話やシーンが多くスクリーン上に流れるからである。なお、Wright (1977, 位置 No. 641) が “*Shane* is the classic of the classic Westerns.” と評価している映画でもあり、例として使用するには適当な作品であろう。

2.1 “the struggle”―西部劇と神話の物語構造における二項対立構造―

フロンティアは、入植地と未開地の境界である。そこでは、**〈文明・文化 vs. 未開・自然〉**、さらに抽象化すれば**〈秩序・Us（我ら） vs. 無秩序・カオス・Them（彼ら）〉**の二項が激しくせめぎ合い、対立する領域である。西部劇の主人公（英雄）は、秩序の側に立ち、「我ら」の仲間・代表であり、無秩序に戦いを挑むという物語構造になっている。つまり、物語の視点から見れば、西部劇はこれらの二項対立構造として顕現・展開する。この単純な二項対立構造は神話にも見られ、古くから用いられている構造であり、物語構造の一つの基礎と考えられる [2]。このことから**西部劇とは、疑似的歴史環境のなかに無秩序が当たり前の世界として設定され、二項の闘争（the struggle）が予見されるジャンルである**、と考えられる。一般的に映画では、犯罪者、怪獣、宇宙人、ウイルス等の無秩序の象徴的行為者を登場させ、無秩序をスクリーン上に構築する。いっぽう、西部劇ではその構造上、**無秩序が当たり前の世界**である。これが西部劇の特徴である。

映画 *Shane* では、〈未開・自然〉は、自作農場入植者（homesteader）の庭にある大木の切り株（象徴的「自然」）によって象徴的に示されている。主人公のシェーンと入植者のジョー・スターレットの二人が協力してそれを撤去しようとしていたとき、妻のマリアンが、馬に曳かせて、切り株を撤去したらと提案するが、それに対してジョーは“Use the team now, this stump could say it beat us（今、馬などを使えば、この切り株に、我々を打ち負かせたと言われかねない）.”と興味深い言い方で応えた。このスターレットの発話の枠組みには、**〈文化・文明・秩序・Us vs. 株・自然・無秩序・**

Them〉の 二項対立的 “struggle” が見て取れる。さらにジョーは続けて“Sometimes nothing will do but your own sweat and muscle.”と（おそらく generic you を用い)、格言めいた言い方で、肉体的自助努力の重要性に言及している。これは、次の項の“the spirit”で言及する個人主義にも通じる表現である。シェーンとジョーは、協力して切り株を撤去し、〈秩序・us〉が〈無秩序・them〉を倒し、一つの〈秩序・Us vs. 無秩序・自然・Them〉という“the struggle”が解消されることになる。

映画 *Shane* の主テーマは、もう一つの“the struggle”に関するものである。スターレット一家を含む入植者たちと、彼らと敵対するライカー一味である。ライカーたちは、牧場主であり、スターレットが所有している土地は自分のものであると主張している。その裏付けは、昔からその土地を、先住民等から守り、管理してきたと主張している。いっぽうのスターレットは、政府の方針（根拠）を示し、自分たちを“homesteader”と呼んでいる（ライカーは、スターレットなどの入植者を“squatters (土地などの不法占拠者)”と呼んでいる)。これは**〈旧（放牧） vs. 新（農業)〉**の争いでもある。**スターレットは、自分たちを政府側に組み入れているので〈秩序〉ということになる。いっぽう〈秩序〉と対立するライカー一味は、〈無秩序・カオス〉として位置づけられている。**

映画 *Shane* における“the struggle”のヤマ場は、入植者を〈被害者〉として構築する事件の発生である。まず、ライカーは、一人の入植者を罠にはめ、雇った殺し屋に殺させる。その死者の棺を埋葬するときに、入植地を去ろうとする一家の家が、ライカーの嫌がらせで放火にあう。このとき、入植者たちが、スターレットをリーダーとして団結をすることになる。つまり、ライカー一味の度重なる攻撃によって、**〈入植者・被害者・Us vs. 牧場主・加害者・Them〉**という二項対立構造が明確に構築されることになる。

“the struggle”は、〈被害者〉と〈英雄〉を生み出し、暴力を通して“the demise”に向かうことになる。

2.2 “the spirit” ―個人主義、自由主義― （略）

2.3 “the demise”―暴力（gunfight）による二項対立構造の終焉―

二項対立の“the struggle”は、酒場におけるシェーンとライカー一味のガンファイトで頂点に達し、シェーンが勝利し、二項対立構造が “終焉＝the demise” を迎える。シェーンは、その闘いの後に、スターレットの息子のジョーイに、争い嫌いで、銃を嫌う母親のマリアンに次の言付けを託す：“...tell her everything's all right and there aren't any more guns in the valley.”これは、二項対立構造が終焉を迎え、平和が到来した宣言ということになる。

なお、この映画の英雄であるシェーンは、“Joey, there's no living with a killing. There's no going back from one. （ジョーイ、人を殺すことは受け入れられることではなく、それを背負って生きるしかないんだ。いったん人を殺めてしまったら、もう殺す前の自分には戻ることはできないんだ。）”と言い残して町を去る。そして、ジョーイが “Shane! Come back!”と叫んでも、彼は、振り返りも、返事もせず、退場していく。つまり、シェーンの英雄としての終焉をも意味していると考えられる。

3. トランプ大統領のディスコース構造―二項対立構造を中心に―

3.1 トランプ大統領の世界認識および構築される二項対立構造

言語学者のハヤカワ(1976, p. 220)は、「アメリカにおけるような二大政党政治の下では、二値的発言(two-valued pronouncements)を吐く機会が多い」と、アメリカ政治における基本的な二項対立構造の存在について指摘している。この指摘は、アメリカ政治内の党派的対立を超え、対外関係にも及ぶ。トランプ大統領の世界観を構築している重要な基礎的・空間的二項対立構造は**〈アメリカ・Us vs. 外国・Them〉**だと考えられる。これは、トランプ大統領の主要なキャッチ・フレーズの**「アメリカ・ファースト」**に示され、第1期目の就任演説では,"From this moment on, it's going to be America First. America First."と連呼されている。このキャッチ・フレーズは、〈アメリカ・Us vs. 外国・Them〉の二項対立的フレームに基づいたものであろう。このことは、上記の"America First"の連呼の後に続く次の発話から明らかであろう。"Every decision on trade, on taxes, on immigration, on foreign affairs, will be made to benefit American workers and American families."さらに2期目の就任演説でも、"During every single day of the Trump administration, I will, very simply, put America first."と、「アメリカ・ファースト」が重要視されている。

トランプ大統領は、時間的世界でも二項対立構造を用いている。それは、彼の政治的目標を象徴する**「Make America Great Again」**に示されている。これには**〈未来 vs. 過去〉**の対立構造が見て取れる。第1期目の就任演説では、"We Will Make America Great Again."と表現され、未来（自分の政権）においてアメリカの再建を果たすという宣言である。つまり、**〈未来・自分の政権・Us vs. 過去・今までの政権・Them〉**という時間的二項対立構造が前提にあるようだ。なお、2期目では、遊説中の銃撃によって耳を撃たれたことに言及して"I was saved by God to make America great again."と、神話化して語っている。

3.2 〈アメリカ・被害者・Us vs. 外国・加害者（犯罪者）・Them〉

「外国は犯罪者」：上記の1期目の発話（"Every decision…American families."）の後に次の発話が続く。"We must **protect our borders** from the **ravages** of other countries making our products, **stealing** our companies, and **destroying** our jobs."トランプ大統領は、経済的現象を犯罪現象の世界として人々に提示し、国民を犯罪の〈被害者〉として構築している。つまり、**〈アメリカ・被害者・Us vs. 外国・加害者・犯罪者・Them〉**という世界の構築である。

「国家非常事態(national emergency)」宣言：トランプ大統領はさまざまなアメリカの状況を「非常事態」と宣言することによって――たとえその状況が一般的には「非常事態」でなくとも――その状況を**「非常事態」と定義し、世界をそのように構築し、人びとに示していることになる。非常事態を宣言することは、本発表で言えば、〈無秩序・カオス〉という世界の構築**である。その〈無秩序・カオス〉と闘い〈秩序〉を取り戻すのが**英雄**としてのトランプ大統領の役割になる。彼の〈無秩序・カオス〉との闘い(the struggle)は、"過激"な行動を生み出しているようである。例えば、世界を相手にした**相互関税のディール、ICE（Immigration and Customs Enforcement）による移民取り締まり、ベネズエラ攻撃（大統領夫妻拘束）、イラン攻撃**などである。

2期目の就任1年後の2026年1月20日の「National Day of Patriotic Devotion」におけるトランプ大統領の演説で、彼は**移民関連の問題**によって、アメリカがいかに被害を受けているかを説明している："When I took office 1 year ago, our country was **in a state of chaos and decline**. Our **borders** were wide open, allowing **criminals, drug dealers, and violent gang members to pour in** and **poison our communities**. **Crime was surging**, law enforcement was under siege, and Christians, conservatives, and

other **innocent Americans** were being **viciously persecuted**."(Trump, January 20, 2026)

ベネズエラ攻撃については、次のように述べている："Maduro and Flores（大統領夫妻）have been indicted in the Southern District of New York. It's Jay Clayton [who indicted them] for **their campaign of deadly narco terrorism** against the United States and its citizens."さらに、石油権益については、次のように述べている："Venezuela unilaterally **seized and sold American oil, American assets, and American platforms** costing us billions and billions of dollars." (Trump, January 3, 2026)

イラン攻撃について、トランプ大統領は次のように述べている："For 47 years, the Iranian regime has chanted "**Death to America**" and waged an unending campaign of **bloodshed and mass murder targeting the United States, our troops and the innocent people** in many, many countries."そしてテロ支援国家と核兵器の所有については次のように述べている："Iran is the world's **No. 1 state sponsor of terror** ... . It has always been the policy of the United States, in particular, my administration, that this terrorist regime can never have a nuclear weapon." (February 28, 2026)

3.3 英雄としてのトランプ大統領

「被害者を守るために闘う英雄=トランプ大統領」："the struggle"において闘うのがトランプ大統領である。彼は、次のように自分を英雄として国民に提示している。"I will **fight for you** with every breath in my body — and I will never, ever let you down."（第 1 期就任演説）そしてこの闘いにおいて勝利するのはアメリカである、つまり彼がアメリカに勝利をもたらすと次のように述べている。"America will start **winning** again, winning like never before."第 2 期目の就任演説でも同様である："I am with you, I will **fight for you**, and I will **win for you**."

トランプ大統領は、第 2 期目の就任演説で興味深い演説をしている："As **commander in chief,** I have no higher responsibility than to **defend our country** from **threats and invasions,** and that is exactly what I am going to do."この発言で興味深いのは、大統領の職責には沢山あるが、そのなかで「commander in chief」を一番重要視していることである。つまり、彼は**〈アメリカ・被害者・Us vs. 外国・加害者・Them〉**という**二項対立構造を一番重要視している**ことになる。

同じ英雄でも、シェーンはかなり異なっている。同映画のほぼ最後に、マリアンがシェーンに、ガンファイトはやめたはずなのに、夫のスターレットの替わりにライカ―一味とガンファイトを行おうとしていることについて、"Are you doing this just for me? "と聞くと、シェーンは、"For you, Marian..."と答え、少し時間をおいて"... and Joe and little Joe."と答える場面がある。彼には、入植者・共同体ためにライカ―一味との決闘を決意したのではなく、マリアンのため、さらにはスターレット一家のために決闘を決意したようだ。シェーンは、彼らとの決闘で勝利し、結果的に入植者の共同体を救うことになるという筋書きであろう。つまり、シェーンは共同体の英雄になることを意図していたわけではなく、**最後（"the demise"）**には、傷つきながら（彼は被弾した）、暗闇の荒野という〈無秩序〉に静かに消えていく。いっぽうのトランプ大統領は、自分が英雄であることを示すために、アメリカという共同体に自分の名前を残そうと躍起になっている。

4. 結論

1）西部劇とトランプ劇場の世界には、基本構造に類似性が見られる。映画 *Shane* で描かれている世界とトランプ大統領が演説や国家非常事態宣言等で構築しようとしている世界は、その二項対立

構造において類似している：**〈秩序・被害者・Us vs. 無秩序・加害者・Them〉**。

2）二項対立構造という“the struggle”を解決するのに、英雄が登場（西部劇ではガンマン、トランプ政権では大統領（最高司令官））し、その解決のために、暴力が使用される場合が多い。

3）英雄が勝利を手にするという類似性があるが、西部劇では英雄は〈Us（共同体）〉を去るが、いっぽう、トランプ大統領は共同体にとどまり、その勝利を誇示する、という大きな差異も見られる。

西部劇とトランプ劇場の類似性は、おそらく偶然ではなく、Richard Slotkin の研究書 *Regeneration Through Violence: The Mythology of the American Frontier, 1600–1860* のタイトルが示しているように、アメリカには暴力による再生という神話（物語）が作られ、それが現在まで受け継がれているようである。このような神話のもとに、西部劇やトランプ劇場が生み出されているのかもしれない。同書が示した考え方と西部劇およびアメリカ政治（とくに、トランプ大統領）との関係についてのさらなる考察が必要である。

注

1. 本稿は、第 16 回日本メディア英語学会年次大会（2026 年 10 月 11 日、大阪電気通信大学）において、「トランプ劇場は西部劇か？」と題して発表した際に、レジュメとして配布したものに大幅に加筆、修正を加えたものである。

2. 二項対立構造は、秩序と混沌に関わるさまざまな文化現象に見出すことができる。たとえば、宗教学者のエリアーデ(1957/1969)は、神話における二項対立について次のように述べている：

> 宇宙開闢神話は、いかにして宇宙が創造されたかを物語る。バビロンでは（旧い年の最後の日と新年の最初の日に行なわれる）アキートゥ祭典の間に、〈創造の詩〉エヌマ・エリシュが厳かに読誦された。祭儀における読誦によって、マルドゥク[発表者注：バビロニア神話に登場する多面的神格をもった神]と海の怪物ティアーマットとの太初の闘争、混沌に終りをもたらしたその神の勝利を人は再現する。マルドゥクは寸断されたティアーマットの身体から宇宙を形成し、またティアーマットの主要な同盟者たる悪魔キングウの血から人間を創った。創造を記念するこの祭が実際宇宙創造行為の再現であったことは、祭儀ならびにこの儀式に用いられる祭詞から確証される。(pp. 67-68)

文化人類学者の山口(1975, p. 1)は、同書「第一章　古風土記における『文化』と『自然』」の冒頭で、「秩序 vs. 混沌」の二項対立的思考が日本古代からあったことを指摘している：

> 我々は通常、我々を取り巻く世界を、友好的なものと敵対的なものに分割する思考に馴れている。その上で、敵対的な世界に、我々にとって好ましがらざる傾向と考える性質を次々に付託する傾向かある。こうした思考は、我々にとって全く身近な世界に対する我々の態度だけに現われるのではなく、人間の意識の展開の歴史的過程の最も早い時期の記録に残されている。人は多分その意識の現われる状態を、混沌を介して自覚してきたと思われる。混沌から身を引き離した瞬間に、彼は混沌を対象化する。混沌の対象化は、秩序の確認への第一歩であったこと

は疑えない。

参考資料

トランプ大統領第 1 期目就任演説(2017)：https://trumpwhitehouse.archives.gov/briefings-statements/the-inaugural-address/

トランプ大統領第 2 期目就任演説(2025)：https://www.whitehouse.gov/remarks/2025/01/the-inaugural-address/

トランプ大統領 National Day of Patriotic Devotion 演説(January 20, 2026)：https://www.whitehouse.gov/presidential-actions/2026/01/national-day-of-patriotic-devotion-2026/

トランプ大統領 Statement on U.S. Action in Venezuela 演説(January 3, 2026)：https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches/january-3-2026-statement-us-action-venezuela

トランプ大統領: Remarks on the U.S. Military Operations Against Iran 演説(February 28, 2026)：https://millercenter.org/the-presidency/presidential-speeches/february-28-2026-remarks-us-military-operations-against-iran

参考文献

American Film Institute. (n.d.). AFI's 10 TOP 10. Retrieved August 5, 2026 from https://www.afi.com/afis-10-top-10/

Slotkin, R. (1973). *Regeneration Through Violence: The Mythology of the American Frontier, 1600–1860*. Wesleyan University Press.

Wright, W. (1977). *Sixguns and Society: A Structural Study of the Western*. University of California Press. Kindle 版.

エリアーデ, M. (1969). 『聖と俗 (風間敏夫, 訳)』法政大学出版局. (原著 1957)

ハヤカワ, S.I. (1976). 『思考と行動における言語 (大久保忠利, 訳)』岩波書店. (原著 (第 3 版) 1972)

山口昌男 (1975). 『文化と両義性』岩波書店.